

# 武田米生先生のご定年退職によせて

大学院会計ファイナンス研究科教授      吉   田      靖

武田米生先生は2010年3月末をもって、千葉商科大学大学院会計ファイナンス研究科を定年退職された。

武田先生は1940年大阪市に生まれ、大阪市立大学を卒業後、1962年4月に株式会社三和銀行（現在の株式会社三菱東京UFJ銀行）に入行された。行内では、支店・本部でお勤めになり、銀行業務をする中で、日本国内としては、非常に早い時期からファイナンシャル・プランナー（FP）業務の重要性に気づかれ、銀行の方針もあり、1986年6月にFP業務専門の会社である株式会社エスエーサービス（現在の三菱UFJ個人財務アドバイザーズ株式会社）の設立に至った。同社の設立は、1987年11月に設立された日本ファイナンシャル・プランナーズ協会（現在の特定非営利活動法人日本ファイナンシャル・プランナーズ協会、以後FP協会と表記する）よりも早く、同社はFP協会の認定教育機関の登録番号No.1であり、現在では、会員数約1,200名にも達し、武田先生の見識の明がおりになったことを示している。

エスエーサービスに移られた後は、1989年6月より取締役、1992年7月から1999年5月までは常務取締役を勤められ、日本におけるFPの黎明期に多くの顧客の相談相手となり、また多くの後進を育て、FPビジネスの体系化にも貢献された。

1999年6月からはFP協会理事、2000年6月には常務理事、2002年6月から2004年5月までは専務理事を歴任され、その間、2001年5月にはFP協会の会員数が10万名を超え、2002年6月にFP協会は、厚生労働大臣よりファイナンシャル・プランニング技能検定に係る指定試験機関の指定を受けるなど、わが国の実態に適したファイナンシャル・プランニングの確立と、その担い手であるファイナンシャル・プランナーの養成及び組織化を図るためにご尽力された。その後もFP協会顧問として、大所高所からの提言をされた。

これらの公的活動もさることながら、ご自身もファイナンシャル・プランナーと

して起業され、現在に至るまで、顧客からの厚い信頼を得てご活躍中である。

さらに、アカデミズムとの連携にも早くから貢献され、2001年3月には日本FP学会の設立に参画され、理事を務められた後、顧問として活動されている。

千葉商科大学には、2006年4月の会計ファイナンス研究科設置とともに、教授として着任され、当時の科目名としては、「金融資産論A」、「金融資産論B」、「金融資産論D」（ちなみに、「金融資産論C」（現在の科目名「デリバティブ」）は小職が担当）、「金融資産運用設計論」、「ポートフォリオ運用・実務」を担当され、長年の実績と経験と理論に基づいた授業はCFP®を目指す学生だけでなく、既にCFP®を取得して実際にFP業務をしている社会人学生からも人気を集めた講義となっていた。その講義の中でも、さらに理論の重要性を学生に説き、それがきっかけで小職の「ポートフォリオ理論」を履修した学生も毎年のように存在した。

授業以外でも、会計ファイナンス研究科の入試説明会では、熱意のこもったスピーチが多く参加者の共感と呼び、参加者の最終的な判断にも寄与されたことが、幾度となくあり、その実行力は多くの教職員に対して範を垂れたものであった。

振り返ると、武田先生がこれまで、ファイナンシャル・プランナーとしてご活躍されている時期は、日本経済のストック化の進展、バブルの崩壊、金融危機などまさに激動の時代であるが、その中で、多くの顧客と学生の信頼を得続けてきたことは、その人格ももちろんのことであるが、前述のような理論あるいは学問重視のぶれない基本姿勢があるためと、小職はお話をする度に感じる次第である。日本では、金融商品を販売するためには、得てして営業力を重視する傾向があるが、市民の生活のためには、理論と実務の両方を兼ね備えたファイナンシャル・プランナーの存在が必要であり、そのような方針の正しさはFP協会のテキストや資格試験の内容の改訂や、何よりも、金融業界の実態に現れていると言っても過言ではなからう。

武田先生には、これまで公私に亘り、アドバイスや励ましの言葉を頂戴してきたが、ご著書の『50歳からの決断！ 快適プランを考える本』（KKベストセラーズ、1989年）を改めて拝読すると、「“50歳”は精神面での一大転機だ」、「50歳代の宿題をどうクリアするか」など、奇しくも50歳を迎えた小職にとっては、人生の先輩からの意味深い言葉が並んでいる。さらに裏表紙にある「決断するのはいからです。考えただけでもワクワクするような、豊かで楽しい第二の人生のプランを、あなたも

ぜひつくってください。」という結びにも勇気づけられる次第である。

以上のように、武田先生はFP業務の確立と後進への指導、さらには自らファイナンシャル・プランナーとして多大な功績を残されると同時に、理論と実務の橋渡しをされ、多くの人々の人生に貢献されてきていることに、深く敬意と感謝の意を表するとともに、今後の一層のご健勝を祈念して本号を捧げることにしたい。